郷土を知る

# 昔々のそお市

むかしむかし

第46回

## 曽於市最古の農業跡

生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

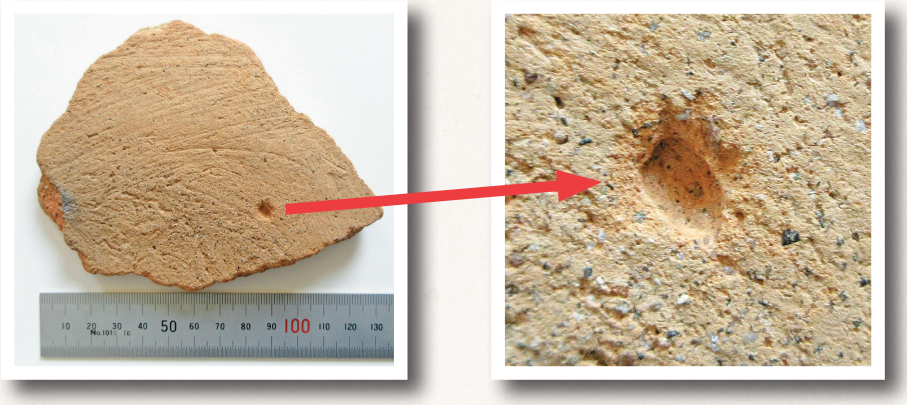
末吉町五位塚にある上中段遺跡は、県営特殊農地保全整備事業にともない、昭和60年に発掘調査が行われました。調査の成果より、縄文時代早期・後期・晩期・中世の遺物が出土し、複合遺跡であることが判明しましたが、縄文時代晩期終末期では驚くべき成果が表れました。

初期の稲作文化にともなう、九州西北部で誕生した夜臼式土器と、丹塗りの彩文土器がともに出土しました。この夜臼式土器にはもみ殻の跡も見られ、この地への稲作の伝搬を示しています。福岡市の板付遺跡では、よそから水を引いてくる灌漑施設を備えた、弥生時代初期の水田跡と共に夜臼式土器が出土しており、初期の稲作文化の伝搬や広がりを示す土器とされています。

上中段遺跡からは水田跡の検出はなく、遺物の出土のみでした。遺跡の立地は標高が約250メートルの台地で近隣に水源もなく、当時の技術では灌漑施設の建設は容易ではなかったと想定されます。そのため陸地を利用した陸稲栽培（陸稲）や、遺跡付近の低湿地で栽培を行ったと想定されます。

また夜臼式土器と共伴して出土した石器は、縄文時代から変化のない形態のもので、使用時期の近い入佐式土器や黒川式土器など、在地の土器の出土量が極めて少ないといった特徴も見られました。

縄文時代終末期から弥生時代初期にかけて九州西北部に伝搬した稲作文化が、新たな形態の土器とともに時間をかけながら各地へ複雑に広がっていきます。上中段遺跡は、その土地に合わせた栽培方法の一端がうかがえ、曽於市で最も古い農業の形態が想定できる貴重な遺跡です。



もみ殻跡の残る土器

【アクセス】
遺物は末吉歴史民俗資料館と曽於市埋蔵文化財センターに展示